

論 文

ダケ・バカリについて

— ガ, シカとの共起 —

服 部 匡

学芸学部・情報メディア学科

0 目的・範囲

本稿は副助詞（接尾辞等として扱われることもある）のダケ・バカリの中核的な用法を分析し、特に、格助詞ガが後続する場合とそうでない場合での意味の相違を明らかにしようとするものである。また、ダケ・バカリと、シカ（～ナイ）やハとの接続、その場合の意味についても論じる。ダケについては前稿（服部（2005））でも扱ったが、不備があり、改めて考えを示すことにする。

ダケとバカリとは、広い意味での限定を行うものであり、また、シカ（～ナイ）を後続しうるなどの共通点がある。格助詞との接続関係（接続しうるものの種類・順序）に関してもおよそ同じである。両者とも、数量を明示して「小型車だけ3台」、「雄ばかり2匹」等のように言うこともできる。1章では、両者の意味用法に関する主な先行の説を取上げ、私見を述べる。

2章では、「だけが・ばかりが」および、意味的にガ格に対応付けられるような「だけ・ばかり」を扱う。例えば、(1)、(2)の「太郎だけ・雨ばかり」は、意味的にはそれぞれガ格に対応付けられる（これらの要素の統語的資格——例えば副詞的要素と見るべきかどうか——については今問わない）。

- (1) 太郎だけ来た。
- (2) 雨ばかり降る。

「～だけ／ばかり」の文に比べると「～だけが／ばかりが」の文は文章語的に響くことがあるが、ガの有無を単に文体の問題と見るのは適切でなく、両者には明確な意味の相違が存在する。例えば、(3)は「だけ」でも「だけが」でも良いが、(4)で「だけ」を用いる文脈は考えにくい。また、

(5)は「ばかり」でも「ばかりが」でも良いが、(6)で「ばかり」を用いるのは不自然に感じられる。

- (3) (うちのクラブでは) 山田 {だけが／だけ} 黒帯だ。
- (4) コンピュータ {だけが／? だけ} 彼の友人だ。
- (5) 今回の会合には、日本人女性 {ばかりが／ばかり} 集まった。
- (6) 大震災で倒壊した兵庫県の朝鮮学校を再建しようと、日本人女性ばかりが「朝鮮学校を支えるおんなたちの会」を結成、[略] (朝日96.8.2)

3章では、「だけしか（～ない）・ばかりしか（～ない）」がどうして成立するのかを論じ、それらの意味を扱う。

なお、「1人だけ・必要な分だけ」のように量を限定する「～だけ」は、ここで扱うものと密接に関連するものとの相違点もあり、詳しくは取上げない。また、「コップに2杯ばかり・3個ばかり」のようにおよその量を表す「～ばかり」は本稿で扱うものとは別の用法と見る。

1 ダケとバカリの基本的な意味について

ダケとバカリの意味を記述した先行の主な説を挙げた後、私見を述べる。

ダケとバカリを何らかの意味で同類の語とみなしてそれぞれの特性を説明した論考は数多い。例えば、松下（1930）は、次のような説明を与えている。

「だけ」は範囲を限定してその一部を単独に扱ひ、事柄の関係する所がその一部以外に出てない意を表す。「ばかり」もそうであるが、其の上に、事柄が専ら其の物に関係する意を含む。されば〔略〕「ばかり」は「専ら」「度々」「頻に」「沢山」「甚しく」等の意を帯びる。

「だけ」は語源は「丈」（物の長さ）である。だから物の範囲を尺度一杯に切る意である。

森田(1972)の説明は、次のようなものである。

「ばかり」は、ある同一同類の主体がある範囲内で行うとか、同一同類の事柄をある範囲内で行うとか、同一同類の対象に対して行われるとか、また、ある同一の事物がある範囲の程度内で存在するとか、あるいはある事態に対応するのがいつも同じ人や物であるとか、いずれの場合も動詞的叙述を前提とし、「同一同類の事物」に重点をおけば限定、「ある範囲」に重点をおけば程度となる。

「だけ」は、ある事物を対象として取り上げるさい、その取り上げるべき範囲をはっきりとある限度で区切り、その範囲外の事物は対象外として排除し、区切られた範囲内の部分のみを取り出し問題とする。区切り、それにはずれる事物を他者として否定することに重点をおけば限定、提示された限点(ママ)の極限範囲に重点をおけば程度となる。

次に、菊地(1983)の説明の概要を示す。菊地氏によれば、バカリは〈同類として括れる事態が数多く認められる〉時に使われるが、〈数多く〉というのは〈同時に数多く〉つまり一度限りのことについての場合もあれば、〈繰り返し数多く〉すなわち〈事ある毎に〉の意の場合もある。

前者は(7)のような場合であり、これも男の子、これも男の子……という目で見た上で、事態を足し算して括っている。また後者は(8)のような場合であり、先月も太郎君を連れて行った、先週も、今日もまた…というように数え上げた上でまとめて表現している。

(7) まあ先生、男の子ばかり連れてどこへ行くの。

(8) 太郎君ばかり連れて行くなんて、不公平だわ。

いずれにせよ〈物事が数多くみとめられ、話手の関心がそれに絞られることをあらわす〉のだが、〈繰り返し多く〉の用法では数の大小は多分に話手の主観によって捉えられるため、一週間21食の食事のうち3~4回そばを食べただけでも(9)のように言える。

(9) この一週間そばばかり食べたよ。

一方、ダケは〈考えられるモノ・コト・量・質のうちで、その範囲のモノ・コト・量・質に画定されることをあらわす〉ため、(9)のバカリをダケに置き換えれば毎日毎食そばを食べたことになる。

例えば(10)は「数多く」の意味に解釈できないためおかし

い。もっとも、対応する否定文の(11)は可能である。(11)のバカリは〈それ以上の程度ではないことをあらわす〉ものであり、このような用法のバカリはダケに置き換えても文が成立する。

(10) 僕は君ばかりが好きなんだ。

(11) 僕は君ばかりが好きじゃないんだ。甘ったれるな。

丹羽(1992:109)は、バカリやダケの行う限定について次のように述べている。

a ここは花ばかりだね。

b ここは花だけだね。

「ばかり」は、〔略〕「ここが花で満たされている」ことを表し、「だけ」は〔略〕「ここは花以外のものはない」ということを表す。もっとも〔略〕両者は相対的なことである。限定とは、当該事態が唯一成立して他の事態は排除されるということだが、それには、他の事態を排除することに重点がある場合と、成立するのは当該事象で尽されるということに重点がある場合がある。前者を「外限定」、後者を「内限定」と名づける。後者、当該事態で尽されるということが成り立つには、それが複数存在する必要があるから、限定されるものが単数の場合は外限定でしかありえない。

定延(2001, 2003)によれば、ダケ・シカは指示対象(複数)の探索体験を意味し、バカリは「メタ探索」を意味する。また、ダケ・シカの文が表現しているのは世界のありさまだが、バカリの文が意味しているのは世界探索の集合のありさまである¹⁾。

ところで、「だけ・ばかり」の意味用法には歴史的な推移があったことが知られている。此島(1973)に次のようにある。

「ばかり」は中世に至って平安朝の「のみ」「ばかり」の両用法を兼ねたが、明治以降は「のみ」の後継者となり、自己本来の用法は新しい「だけ」に譲ったわけで、平安朝の「のみ」「ばかり」の現代語訳にバカリとダケが当たるのは、このような歴史的変遷の結果なのである。ただ、「だけ」の成立が新しいだけに、今なお「だけ」に当たる所に古い「ばかり」の用いられることがある。たとえば、

○こんな事を知らないのは君ばかりだ。

○もうすっかり用意ができて、あとは出発するばかりになっ

ている。

このように古い用法の残存もあるため、バカリの共時的な意味用法の記述を包括的に行うことは複雑な作業となる。例えば、次のような例は、現在のダケに相当するようなバカリの古い用法、または、そこから現在中核的な用法へと至る中間段階の用法と見る余地がある（なお、(12)–(14)はいずれもガを落とすと現在の語感では不自然なように思われる。(13)は、菊池氏の指摘の通り、対応する肯定文が成立しない）。こうした用法変化の経緯はそれ自体興味深い問題ではあるものの、本稿の範囲を超える²⁾。

(12) 駒子もいるなと思う間もなく駒子ばかりが見えた。

(川端康成 雪国)

(13) 「ゴッホやミレーばかりが芸術ではない。〔略〕」

(朝日92.3.22)

(14) 〔略〕なんとも言いようがないほどのお美しさでした。それを言葉にすることが出来ず、ただ胸の高鳴る動悸ばかりがその人の美しさ素晴らしさを姫君に教えるのでした。(三日月物語 みやびな恋絵巻 橋本治)

私見では、ダケとバカリの現在の中核的用法での意味はおよそ次のようなものである（意味の記述として完全ではないが、本稿の主題を扱う限りではこれで足りる）。

「X ダケ」とは、〈X を過不足なく含む〉、つまり、〈X を含み、X 以外を含まない〉ということである。

「X バカリ」とは、〈どの例（あるいは部分）をとっても X〉ということである。当然、X 以外である例はそこに含まれない。

これらの形式の基本的な意味が「X だけ（が）Y」、「X ばかり（が）Y」という文の意味にどのように貢献するかは、次章で論じる。

2 ダケ・バカリとガ

本章で、ダケ・バカリのそれぞれにガが後続する／しない場合の意味用法の相違を考察する。

このような問題についての先行研究をいくつか挙げる。詳しい説明はないものの岡本（1944）に次のような指摘がある。

真の偉人だけがでることだ。（この場合はガを伴うのが普通）

君だけ（が）来るといい。

〔略〕同じ副助詞にしても、前後のコトバによって、ある場合にはガが必要であり、ある場合にはガが必要でないようである。

また、ダケについて寺村（1991）が次のように述べている。

〔略〕「～ダケ」は、述語が動詞のとき、とくに「～」が数量を表わす表現であるとき、動詞の表わす動作、できごとの内容を量的に限定する副詞的な性格を持つ。その性格の強さに比例して格助詞の必要性は少なくなる。これに対して、述語がなにかについての判断、性状の特徴づけであるとき、その判断の対象であるもの（X）にダケが付いて「唯一のもの」という限定が加わったとき、その「X だけ」は、判断の対象を排他的に示す「ガ」が必要になる。

また寺村氏は(15)がおかしい理由を説明して、「X ダケ P」という文の発せられる談話的狀況は「P に結びつくものとして X 以外のものがあるのではないか」という見方が、話し手、聞き手、あるいは話し手が想定する世間一般にあるという状況である、と述べている。つまり常識的に所長は一人しかいないから(15)はおかしいのである。

(15) *わたしだけが所長です。（判定は寺村氏による）

2.1 「だけ」と「だけが」

「X だけ Y」というのはどのような文であろうか。「あいつだけ黒帯だ」、「麻婆豆腐だけある」、「太郎だけ来た」等と何の先行文脈もなく発話することはまれであり、これは通常、何かについて述べる文である。特に、「X だけ」とは何についてその中で「X だけ」だと言うのか、つまり、どのようなものを全体としてその中で「X を過不足なく含む」と言うのかが了解されなければならない。(16)のように文中に、ある全体が明示されることがある。また、たとえ明示されていなくても暗に問題とされる全体があり、そのうちのどれほどの部分が Y であるかを述べるのが通常である。

(16) うちの部では、太郎だけ黒帯だ。

「問題となる全体の中で、X を過不足なく含む部分が Y である」というのは、つまり、「X の部分については Y

であり、X以外の部分についてはYでない」というように、問題となる全体を二つの部分に分割することである。

一方、「XだけがY」という文では、Gは他の場合と同様に指定・中立叙述などの働きを持っている。上記の「XだけY」と同様な状況で用いられることもあるが（例えば⑴のようにも言える）、それ以外の場合にも用いうる。

⑴ うちの部では、太郎だけが黒帯だ。

「だけが」は使用可能だが「だけ」は用いにくいというタイプの文を観察して両者の相違点を明らかにしていく。

まず名詞述語等の文から見る。「だけが」に比べて「だけ」が名詞述語文に用いられることは顕著に少ない³⁾。名詞述語等の文ではGは通常、指定 (specification) の意味を持つと言われる⁴⁾。上林 (1988) によれば、指定文「AがBだ」は、次のような意味を持つ。

⑵ 「B」という表現で指示される指示対象、あるいは「B」という性質を持つものをさがせば、それは「A」という表現の指示対象である。

指示性を持つ通常の名詞とは異なるが、「頼りだ」のような述語は、「(私は)～が頼りだ」とは言うが、「これは頼りだ、あれは頼りでない」などと言うことはなく、本質的に指定を要求する（「(私にとっての)頼りだ」ということを一種の属性と見てその有無によって人や事を分類するようなことはない）。このような述語に対してはGが必須であり「だけ」を用いることはできない。⑶の意味は、「頼りであるものとしてはあなたが挙げられ他に挙げられるものはない」ということである⁵⁾。なお、指定されるものは必ずしも単一である必要はなく、「あなたとあなたのお父さんだけ」のように複数であっても群として唯一的に決まれば良い。

⑶ あなた {[?]だけ・だけが} 頼りだ。

これと対照的に、「会社員」のように、属性として解釈し易い名詞の場合は、「(会員の中では)山田さんと谷口さんが会社員です」のように指定を行うこともでき、また、「山田さんと谷口さんは会社員です。森さんと私は違います」等とも言える。このような述語では、例えばある会の会員を話題にしている文脈での⑷のように、「だけ」も「だけが」も用いることができる（ただ、上述の通り名詞

述語に対して「だけ」が用いられることは一般に少なく、⑷は「だけ」だとやや不自然に感じられるかもしれないが、⑷ならば可能と思われる。

⑷ 私 {だけ・だけが} 会社員です。

⑸ 私だけ会社員で、他の人はみんな学生です。

「XだけがY」という指定文では、一次的には、Gの働きによってYに当るもののリストが行われ、二次的に、Gの働きによる排他性が生じる。「Yに当るものとして指定されるものにはYが過不足なく含まれる」、言い換えれば、「Yに当るものとしてはXが挙げられ他に挙げられるものはない」ということである。

一方「XだけY」の働きは、問題となる全体を「Xの部分についてはYであり、X以外の部分についてはYではない」というように分割することであると既に述べた。

ここで⑷のように、「会員」という全体が問題とされ、各会員について「会社員」という属性の有無が決まっている場合には、「会社員であるものとしては私が挙げられ他に挙げられるものはない」と述べることも、「私については会社員であると言え、私以外については会社員であるとは言えない」と述べることも、同様のことを表すことになる。

なぜなら、問題となる全体が定まっている場合、「誰がYか」を余すところなく挙げることは、結果として「誰がYでないか」を余すところなく特定する働きをも兼ねる。すなわち、問題となる全体をYであるものとそうでないものに分割する働きをすることと同じになるのである。

今少し例を見ておく。⑹で「だけ」が用いられる文脈は考えにくい。⑹は、普通の解釈では、彼の友達であるものを挙げる文であって、問題となる人々や物を二種類のグループに分割しようとする文ではない⁶⁾。

⑹ コンピュータ {だけが/[?]だけ} 彼の友達だ。

なお、⑹を丸ごと否定して次のように言え、この場合もGは必要である。

⑺ コンピュータだけが彼の友達ではない。

次に⑺を見る。「最終解脱者」という語に指定を要求する性質があるとは必ずしも言えないが、⑺で「だけ」を用いるのは不自然である。

②4 (A 教信者によると) 浅原 {[?] だけ / だけが} 最終解脱者だ。

これは、世界に他にどんな者がいるかに関係なく、最終解脱者は浅原以外にいないと述べているのである。(浅原, A, B—) というような、特定の人物のリスト中で一定部分は最終解脱者であり、残余の部分は異なると述べているわけではない(浅原を含む10人程度の宗教関係者のリストを前においてそれについて述べるような特殊な文脈ならば、「だけ」を用いる余地が生じる)。

前掲寺村氏の言う「〈唯一のもの〉という限定」とは特定の全体に相対的ではない排他的指定のことであるとすれば、それはまさに正しい記述である。

名詞述語等の文に続いて、存在文を観察する。次のように絶対的な意味で存在する対象のリストを与える文では、「だけ」は用いられない(西山(2003)のいうリスト存在文の変種と考えられる)。「シラネアオイ属には、シラネアオイはあり、〇〇はない」などとは言わず、これは本質的にガを要求する文である。シラネアオイ属に属するものとしてはシラネアオイがあり他にはないと述べている。

②5 シラネアオイ属にはただ一種、シラネアオイだけがある。

続いて一般的な動詞述語文等を観察する。「X だけが Y」では、ガは他の種類の文の場合と同様に、中立叙述、指定のような性格を持つ。中立叙述ならば、「X を過不足なく含むあるまとまりが存在して、それについて Y」という意味になる。いずれにしても、必ずしもある全体を問題にする必要はない。

次のような文では、「だけ」を用いる文脈が考えにくい。これらは特定時空での事物や出来事存在(成立)を述べる文である。いずれにせよ、普通の解釈では、ある全体が問題になっているわけではない。このため、ガが必須になるものと思われる。

②6 新しい庁舎だけがまぶしかった。

②7 祖父は、病院のベッドで、さまざまなコードや管を全身に付けられ、機械が発する信号音だけが、まだ生きていたことを物語っていた。

(毎日 '00.6.24 みんなの広場)

その他多くの場合、動詞述語文では、「だけ / だけが」

の置き換えが可能で、大きくは意味が変わらない。これらの例では、想定される全体が分割しうる。

②8 卒業式の日、同学年4クラスのうち僕らのクラスだけが、ヨーロッパ風の正門から出ることができた。

(毎日98.8.15 学校と私)

②9 東京の子と違って、髪を染めたりしたらその子だけ突出して目立つし、しにくい」と黒磯署幹部はいう。

(毎日98.2.5 暴発する10代)

③0 鍵がこじ開けられ、現金だけが持ち去られていた。

最後に、「(「太郎が来た：太郎来た」のような)一般的な主格での助詞ガの有無と、「～だけが / ～だけ」との関係について述べる。既述の通り③1, ③2のようなタイプの文は本質的にガを要求する文であり、文脈を問わず無助詞主格は用いられない。これは、①9, ②5で「だけ」を用いえないことに対応する事実である。

③1 あなた {が / [?] φ} 頼りです。

③2 シラネアオイ属にはただ一種、シラネアオイ {が / [?] φ} ある

しかしながら、文脈に応じてガが必要になるというタイプの文もあり、そこでは無助詞主格と「だけ」の使用条件は一致しない。例えば、Aの質問の、いわゆる焦点部分に対し特定の値を指定しようとするればB1のようにガを用いなければならないが、問題とする全体の中でどのような部分が帰ったのかを述べて答にするのなら、B2のように「だけ」を用いることもできるのである。

③3 A：誰が途中で帰りましたか？

B1：太郎 {が・[?] φ} 帰りました。

B2：太郎 {だけが・だけ} 帰りました。

2.2 ばかり / ばかりが

「X ばかり Y」というのは、「それについて Y が成り立つようななどの例(あるいは、部分)を取っても、X だ」ということである。

例えば「男の子ばかり来た」というのは、「来た者のどの例を取っても、それぞれ男の子である」ということである。菊地氏の指摘の通り、これは必ずしも「現実に来た者のすべての例が男の子だ」を意味するわけではない。念頭に登る例の範囲内で、「来た者のどの例を取っても男の子

だ」と言えれば良いのである⁷⁾。ある問題とされる範囲の例について、その構成を「男の子ばかり（どの例を取っても男の子）」と述べるのであって、この点、「X だけ Y」の文と一面の共通性がある。

一方、「X ばかりが Y」は、上で述べた「X ばかり Y」と同様な状況で用いることもできるが、それ以外にも用いる場合がある。以下に「ばかりが」は使用できるが「ばかり」は使用できないという種類の文をいくつか示して相違点を明確にする。

- (34) 大震災で倒壊した兵庫県の朝鮮学校を再建しようと、日本人女性ばかりが「朝鮮学校を支えるおんなたちの会」を結成、[略] (朝日96.8.2)
- (35) 保存会のメンバー約40人が浴衣姿でほぼ1年ぶりに勢ぞろい。小学生から大人まで男性ばかりが、軽やかに鉦、笛、太鼓による「コンチキチン、コンチキチン」の音を一带に響かせた。(朝日90.6.2)
- (36) どうぞ鳥取会の扉をたたいてみて下さい。肝っ玉の太いオバサンばかりが、ニコニコしながらあなたをお迎えするでしょう。(毎日98.9.24)

これらは、同様の事態が幾度も繰り返されるというのではなく、また、複数の者が個々別々に同様のことを行うというのではなく、複数の者が「一団となって」行う動作を述べている（「結成する」はそうした解釈しか許さない特殊な述語である）。このような集合的 (collective) 解釈が要請される場合、「～ばかりが～」とは言えても「～ばかり～」とは言えない。

上記に類似した現象は他にもあり、37)でクラスの範囲内での数量を表す「15人」がガを伴わなければ、集合的解釈ができない。一方、38)のように分配的 (distributive) 解釈で良い場合には、ガがあってもなくても良い。副詞的に用いられた数量表現は、意味的には、ある集団を個々に分配する仕方です述語と結合する (Gunji 他 (1998) が、出来事への間接的計量という観点から説明を与えている)。

- (37) (クラスでは) 15人 {が/φ} 応援団を結成した。
- (38) (クラスでは) 15人 {が/φ} 遅刻した。

ガを伴う「15人」が「15人からなる集団」を表しうると同様、ガを伴う「X ばかり」は「X ばかりからなる集団」つまり「すべて X である集団」を表すことができる。

一方、次の例も集団で行う動作を表してはいるが、この

場合は「～ばかり～」でも良いように感じられる。この例では「従業員 A が踊る、従業員 B が踊る……」といった個別の動作に分解して考えることが容易である⁸⁾。

- (39) 先日、久しぶりにカラオケバーに行ったら、ガラガラだった。従業員の女性ばかりが、元気よく踊っている。(朝日93.11.6)

次のような相違も上のことから説明可能である。(41)の述べていることは、「風呂に老人の一団がいて、彼らが掃除をしていた」ということである。

- (40) 露天風呂に行ってみると、老人 {ばかりが・ばかり} 入浴していた。
- (41) 露天風呂に行ってみると、老人 {ばかりが・? ばかり} 掃除をしていた。

必ずしも共同して行う作業等でなくても、「ばかり」と「ばかりが」で微妙な相違が生じる場合がある。次の例が単純に「公園に一群の老人がいて彼らがひなたぼっこをしている」ということを述べたいのなら、「ばかりが」が適切で「ばかり」は用いにくい。

- (42) 公園では、老人ばかりがてんでにひなたぼっこをしている。

要するに、「X ばかりが Y」は、通常は分配的に述語と結びつくが、これは「Y であるものはどれも X だ」のような個別的普遍量化の意味になり、「X ばかり」の意味とほぼ同じである。特殊な場合として「X ばかり (が)」が集団を表し、「ある集団が存在して、それが Y である」という解釈を取ることがあるが、これは「X ばかり Y」には相当しない。

一方、既に述べた通り「X ばかり Y」というのは、ある問題となる範囲の例について、「Y が成り立つような」などの例を取っても、X だ」ということであるから、本質的に分配的である。

このような事情から、実際には多くの例では両者のどちらも使用できる。どちらも使用できる例について、以下簡単に観察しておく。

「ばかり (が)」が名詞述語文に用いられることは少ない。(43)のような文は可能であるが、これは「前日も、また

今回も「一」といった多回の事柄を表すものである。一方(44)は、多回の事柄とは解し難いので、不自然である。

- (43) 太郎ばかり(が)会長だ。
 (44) ? 太郎(と次郎)ばかり(が)友人だ。

ただし、ある類に属する対象それぞれについての述語の成立を表す(45)のような文は可能である(「この場にいる男女の中では」のような限定があると特に考え易い)。

- (45) 女性ばかり(が)A社の社員だ。

その他、多くの文では「ばかり／ばかりが」のどちらもが使用可能である。先行研究で指摘されている通り、(46)のように同一対象(単数とは限らず「太郎と次郎」等でも良い)についての複数回の成立(YなのはいつもXだ)を表す場合や、(47)のように同一の種類に属する複数の対象についての事態の同時成立(YなのはどれもXだ)を表す場合がある。(47)には他に、異なる男の子(単複)が入代り立代わり遊んでいるという場合や、同一の男の子(単複)が繰り返し遊んでいるという場合もありうる。

- (46) 太郎ばかり(が)来る。
 (47) 男の子ばかり(が)遊んでいる。

次の(48)は、複数の例に対する認識の成立を表す。また、(49)は、複数回にわたる認識の成立を表している。

- (48) どこまでも、畑ばかり(が)見える。
 (49) 何度見ても、給水塔ばかり(が)見える。

次の例は「特に際立って認識される」といった意味の述語を用いたものであり、やはり多数回成立する事柄を表している。

- (50) いま鉄骨が組まれたまま工事が中断されたビルが
 ちこちに放置され、ブッシュが転じて赤茶けた空間
 ばかりが目につく。(朝日88.1.5)

以上のような説明からやや外れた例として次のようなものがある。(51)は、「多いものはどれを取ってもぎすぎすした事だ」のように解しにくい。他の解釈も考えられないわけではないが、これは、「ぎすぎすした事が多くある」

〔ぎすぎすした事ばかりがある〕の2文を一つにまとめた文とも考えられる(「多い」は一種の存在述語として働く性質を持っている。服部(2002, 2004b)を参照されたい)。

- (51) このところ日米関係をめぐる話題は何かときすぎすした事ばかりが多いが〔略〕(朝日89.5.2)
 (52) 今でも、人数から言うと、女子の方が、三対二ぐらいの比率で多い。〔略〕初めて、割り当ての結果を知った時、「ひやあ、女便所ばかり多いんだろうな」(曾野綾子 太郎物語)

2.3 2章のまとめと課題

2章では、意味的観点から「だけ・だけが」の相違、「ばかり・ばかりが」の相違を明らかにし、特に「だけが」と言えて「だけ」と言えない場合、「ばかりが」と言えて「ばかり」と言えない場合を特定しその理由を説明した。

「XだけY」というのは問題とされる全体について、そのうちどれほどの部分がYであるかを述べる文である。また、「XばかりY」というのは、ある問題とされる範囲の例についてその構成を述べる文である。一方、「XだけがY」、「XばかりがY」では、Gは一般的な働きを持ち、文が使用できる場合はより広い範囲にわたる。

G格の場合のみを問題にしたが、ヲ格以下については今後の課題である(テ格については森田良行氏・久野暉氏らの研究がある)。また、格を問わず沼田(1986)の言う「Bスコープ」の例は扱えていない⁹⁾。

ダケについて、ヲ格では、口頭語では「だけ」が好まれる傾向があるものの、殆どの場合「だけ／だけを」のどちらも使用可能で意味も大きく異なる。しかし、(53)のように、「だけ」とは言えるが「だけを」と言うとな自然になることがある(G格でも、そのような例がないわけではない)。

- (53) ちょっとこの点だけ調べておいてください。

バカリについても、ヲ格では、口頭語では「ばかり」が用いられ易いが、一般的には「ばかり／ばかりを」のどちらも可能で意味に大きな相違はないようである。

3 ダケ・バカリとシカ

ダケ、バカリのどちらにもシカが後続することができる(格助詞を挟んで「だけにしか」等と言うこともある)。た

だし、「ばかりしか」の実例は少ない。

- 54) 汽車やバスなどの交通機関は、老人と子供だけしか使えないことになっていた。(朝日91.7.26)
- 55) ダイエーだけしか頭の中になかった高校生投手を1位指名したとき、交渉の難航は十分に予想された。(毎日98.12.6)
- 56) その店は「コ」の字型のカウンターだけしかなくて、真中に調理場があった。(椎名誠 新橋烏森口青春篇)
- 57) お世話になった家で、小学生だった長男を脳しゅようで亡くした母親に会った。生前、テストの点数のことばかりしか、会話がなかった。(朝日94.1.14)
- 58) 「小さいころは麦ご飯ばかりしか食べられなかったし、靴もまともなものは買えなかった。[略]」(朝日88.9.27)
- 59) 大きな体がもんどりうってジャンプする迫力。まごまごしていると、いつもしっぽばかりしか写真が撮れませんけど(笑い)。(朝日94.3.5)

「だけしか・ばかりしか」という言い方が成立するということは、ダケ・バカリ・シカの3要素を単純に同列に並ぶものと見るのが適切でないことを意味する。これは、これら要素の意味用法を比較する近年の研究でしばしば無視または軽視されてきた点である¹⁰⁾。なお、伝統的には、ダケ・バカリは副助詞、シカは係助詞として区別する見方があった(山田(1936))。

私見では、「XしかYない」は、X以外のすべてのX1, X2……に関してYの成立を否定するものである(Xが何かのスケール上の表現ならば、「Xより高い値」に関しての否定となる)。これは、少なくとも、「X」と「X以外(以上)」とが区分可能でなければ成り立たない(この理由により、「いつも、全部、(少なくとも)誰か」のような表現には、特殊な解釈の場合を除けばシカ~ナイがつかない)。服部(2004a)で関連した議論を行っている。

「Xバカリ」の意味は「どの例を取ってもX」だと述べたがこれは、一面では、当該の例をX以外の例と区分していることになる。「Xばかりしかない」は、「Yを成立させるようななどの例もXである他、何物もYを成立させない」ということである。

一方、「Xダケ」は、Xを過不足なく含むということであり、これによって取り出される部分は当然X以外のもの

のと区分される。「XだけしかYない」というのは、「Xを過不足なく含む部分の外にある何物についてもYは成り立たない」ということである¹¹⁾。

ところで「少なくともこの値については成立する」という最低の値を対比的に提示するハについていうと、「~だけは」とは言えるが「~ばかりは」とは言えない(「命ばかりはお助けください」、「こればかりはどうにもならない」やその類例は除く。これらは古い用法の残存と考えられる)。なお「~だけは」のすべての例のハがこのタイプに当るわけではない。

- 60) 花子だけは来る。
61) ?花子ばかりは来る。

これは、バカリが「全部Xだ」あるいは「Xが全部だ」というような普遍量化的な性質を持つためであって、「全部ではある」などとは(量的な面からの対比の意味では)言わないことに通じる現象である。それより大きな値との対比ができないためである。

対照的に、「良いことばかりはない」のような否定文は可能であるが、これも、「全部ではない」のようないわゆる部分否定が成立することに対応する。

用例出典

朝日新聞・毎日新聞の記事は記事データベースによるものであり、著作権者である各新聞社の許諾を得て研究用に使用しているものである。

注

- 1) 「スキヤニング」のような観点からのダケ・シカの研究としては早く Miyawaki (1972) があり、「だけしか」、「だけくらいしか」のような形も扱われている。
- 2) 明治期東京語でのダケの出現環境別の計量的調査結果が寺田(2000)に示されている。
- 3) これは、恐らく、「3人」のような量表現が名詞述語等に対して持たれにくいことと同様の理由による。三原(2004:60)は、恒常的状态述語では数量詞の連結ができず一時的状態述語では可能であると述べている(もっとも存在述語の場合は恒常的かどうかに関わらず氏のいう連結が可能である)。ただし、述語の種類に対する制限は、「~だけ」の場合の方が緩やかであ

る。

- 4) 久野 (1972: 32) は、⑥2のような文でのガは「総記 (exhaustive listing)」を表すものであるとした。久野氏によれば (元々黒田成幸氏の分析による由である)、この例は「今問題にしている事物の中で学生なのは太郎です」、あるいは、「今問題にしている事物の中で太郎だけが学生です」のような意味になり、ガは総記を表す。また、述語が恒常的状态・習慣的動作を表す場合にはガは総記の解釈しかない。

⑥2 太郎が学生です。

しかしながら、西山 (1979) は、久野氏の言う「総記」には「該当するものを挙げる」(listing) という側面と、「他のものを排除する」(exhaustive) という側面が混在しており後者はむしろ語用論的な側面に属するので、当該のガは意味用法としては「総記」ではなく「指定 (specification)」と呼ぶべきである旨批判しており、これは妥当なように思われる。実際、⑥3のようにも言える。

⑥3 A: 誰が学生ですか?

B: ええと。太郎が学生です。次郎も三郎もそうです。

「今問題にしている事物の中で太郎だけが」云々という久野氏の「総記」の説明そのものが語っているように、「総記 (排他)」という意味特徴は、ガではなくむしろダケガに当てはまるものである (もっとも「今問題にしている事物の中で」という限定は必ずしも必要ない)。⑥4のBのようには言えないことから分かるように、この場合のダケガの意味は「該当するものを挙げる」、「他のものを排除する」という両方の側面を有している。

⑥4 A: 誰が学生ですか?

B: ? ええと。太郎だけが学生です。次郎も三郎もそうです。

なお、丹羽 (1988) によれば恒常的状态等を表す文ではガは総記の解釈しか受けないという久野氏の制約は誤りであり、総記か中立叙述かというのはどの程度排他性が高いかという連続的なものである。菊地 (1997) が、やはり「解答提示」(総記に代る概念) と中立叙述とに連続性を認め、それぞれの成立条件の包括的な記述を行っている。

- 5) 「頼り」は、西山 (2003) の言う「非飽和名詞」(ノ格等に相対的に外延が決定される名詞) の一種であるが、その中でも、値の指定を要求する特殊な語である

(前稿では「唯一またはごく限られた対象」の指定を要求すると述べたが、それは本質的な点ではなかった)。

「頼り」という語の出現環境はほぼ次の3種類に限られる(「頼りの○○」などもあるがa)の連体化と見られる。また、「唯一の頼り、最大の頼り」のように修飾語を伴うこともある)。「頼り」ほどには環境が限定されていないが近い性格の語には「よりどころ、めあて、きっかけ」などがある。

a) 「○○が頼りだ」

b) 「頼りは○○だ」

c) 「○○を頼りに (する)」

付帯状況を表す「N₁をN₂に」構文については村木 (1983) による詳細な記述的研究があり、寺村 (1983) が成立条件の説明を与えている。また、三宅 (1999) がN₂を非飽和名詞という観点から捉えている。

なお、⑥5のような文では、ヲ格としては例外的に格助詞を落とすことができないが、これはc)の一種である。c)の構文でのヲの必要性については、なお解明すべき点が残る。

⑥5 「うなぎ」は、妻殺しの過去を持ちウナギだけを話し相手にしている男が主人公だ。

(毎日 '97.5.25 社説)

- 6) 「(私の)友人」のような述語に対しては「だけ」が決して用いられないというわけではない。例えば次のように言えることがある。眼の前に存在する人の群を、自分の友人とそうでない人とに分割している。

⑥6 あそこに座っているあの男の子だけ友人です。

他は、みんな知らない人です。

- 7) これに類したことは「どの場合を取っても～である」というような、量化を含む文などでも観察される。例えば⑥7の文は、店が現実のすべての場合に休みでなくても、念頭に登るどの場合にも休みであれば成立する。

⑥7 この店はいつも休みだ。

同様に、「XばかりY」も、念頭に登る例がどれもXであれば良いのである。

Partee (1995) は、広義の量化詞を含む文を、Operator (量化詞自体)、Restrictor, Nuclear Scopeの三者からなるものとしている。バカリを一種の量化の表現と見れば、「NばかりPred」のような文ではPredがRestrictorでありNがNuclear Scopeであって二者の関係は「どのNもPred」のような文の場合とは逆になっているという見方もできる。

- 8) なお、通常集団を主語とする動詞であっても「女性ば

かりが並ぶ／集まる／揃う／固まる」などでは、ガがなくとも良い。これは《女性1と女性2が並び、女性3が並び…》というような分解が可能である。

- 9) 前稿では、「だけ・だけを」の使用条件はガ格の場合と同じ原則に従うと考えたが、これについては一旦撤回し保留する。F スコープに関しても同様である。
- 10) とりわけ、ダケとシカ～ナイとでは「影の意味」と「表の意味」、あるいは「第一陳述」と「第二陳述」の関係が逆転していると見る寺村(1991:165)、久野(1999:311)のような分析は、「だけしか」を説明しようとする矛盾に陥る。
- 11) 既に指摘したことである(服部(2004a))が、次のように、「XしかYない」とは言えるが「XだけしかYない」とは言えない場合がある。(68), (69)は単一主体の一回の出来事とする。

(68) あの科目は良 {しか／? だけしか} 取れなかった。

(69) あの試験は20点 {しか／だけしか} 取れなかった。

(70) あの赤ちゃんはまだよちよちと {しか／? だけしか} 歩けない。

100点満点に対する20点は全体一部分関係にあるが、成績の評価段階や赤ん坊の歩き方の段階に関しては全体一部分関係が成り立たない。しかし、「より高い／低い値」という関係は成り立つ(ただし、(70)は、何種類かの歩き方が(発達段階としてではなく)並列的に考えられる中からの選択と見れば全体一部分関係が構成されて文が可能になる余地はある)。このことが「過不足なく含む」というダケの意味に矛盾するため(一回の事態では)「～良だけ取った」などと言えず、従って「だけしか」とも言えないのである。

沼田(1986:203)は「だけ」文と「しか～ない」文は論理的に同義だと述べているが、支持できない。

参照文献

- Gunji, Takao and Koiti Hasida (1998) Measurement and Quantification, *Topics in Constraint-Based Grammar of Japanese*, 39-79. Kluwer Academic Publishers.
- Miyawaki, Kuniko (1972) On DAKE and SHIKA, *Annual Bulletin*, Research Institute for Logopedics and Phoniatrics, 6: 111-22.

Partee, Barbara H. (1995) Quantificational Structures and Compositionality, Emmon Bach et al (eds.) *Quantification in Natural Language*. Kluwer Academic Publishers.

岡本千万太郎(1944)係助詞・副助詞と格『国語学論集』岩波書店

上林洋二(1988)指定文と指定文——ハとガの一面『筑波大学文芸言語研究・言語編』14, 57-74

菊地康人(1983)バカリ・ダケ『意味分析』東京大学文学部言語学研究室

_____ (1996)「が」の用法の概観 川端・仁田編『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房

久野暲(1972)『日本文法研究』大修館

_____ (1982)『新日本文法研究』大修館

_____ (1999)「ダケ・シカ」構文の意味と構造 アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育 実用的言語理論の構築を目指して』くろしお出版

此島正年(1973)『国語助詞の研究 助詞史素描』桜楓社

定延利之(2001)探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」『日本語文法』1-1, 111-136

_____ (2003)「現代語の限定系のとりたて」『日本語のとりたて——現代語と歴史的変化・地理的変異』くろしお出版

寺田洋枝(2000)明治期東京語における「だけ」の限定用法『国語研究』63, 65-86

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版

_____ (1983)「付帯状況」表現の成立の条件——「XヲYニ……スル」という文型をめぐる『日本語学』2-10

西山祐二(1979)新情報・旧情報という概念について『研究報告・日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』

_____ (2003)『日本語名詞句の意味論と語用論——指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房

丹羽哲也(1988)有題文と無題文、現象(描写)文、助詞「が」の問題『国語国文』57-6, 7

_____ (1992)副助詞における程度と取り立て『人文研究』44-13, 92-128

沼田善子(1986)とりたて詞各論 奥津敬一郎編『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

服部匡(2002)「多寡を表す述語の特性について——肯定／否定関係との平行性を中心に——」玉村文郎編『日

本語学と言語学』: 61-73 東京: 明治書院

(2004a) 小さな量を表わす表現の意味的性質について『言語研究』124, 83-110

(2004b) 量の表現における否定的／肯定的スケールについて (要旨)『京都大学言語学研究』23, 214

(2005) 「だけが・だけを」と「だけ」『同志社女子大学日本語日本文学』17, 1-19

松下大 三郎 (1930)『増補校訂標準日本口語法』(勉誠社復刻1977)

三原健一 (2004)『アスペクト解釈と統語現象』松柏社

三宅知弘 (1999) 名詞の「飽和性」について『国文鶴見』35, 左1-10

村木新次郎 (1983)「地図をたよりに、人をたずねる」という言い方 渡辺実編『副用語の研究』明治書院

森田良行 (1972)「だけ、ばかり」の用法『早稲田大学語学研究所紀要』10, 1-17

山田孝雄 (1936)『日本文法学概論』宝文館

付記 草稿段階で、丹羽哲也、藤田保幸、早津恵美子の各氏から貴重なご意見・ご指摘を頂いた。また、前稿に対して田野村忠温氏より頂いたコメントに負うところも大きい。心からお礼申し上げます。